様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０３１６９

研究課題名（和文）イギリス帝国の歴史認識と忘却：世界37植民地における文書隠蔽工作の初期展開

研究課題名（英文）Colonial Cover-up: Britain's Destruction of Sensitive Records Worldwide

研究代表者
佐藤　尚平（Sato, Shohei）

早稲田大学・文学学術院・准教授

研究者番号：７０５９７９３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：第二次世界大戦後、ヨーロッパや日本の諸帝国は、世界各地から撤退した。この時に、各帝国にとって都合の悪い過去の記録が何らかの形で処分されただろうということは想像にかたくないが、その多くは謎に包まれている。当時最大勢力の一つであったイギリス帝国も文書の隠蔽を行なっただろうと考えられるが、やはりその詳細はほとんど知られていない。こうした中、イギリス帝国が隠蔽したはずの植民地文書が、実はロンドン郊外に保管されていたということが近年明らかになった。本研究計画は、この新出史料を読み解きながら、イギリス帝国が世界各地で行なった文書隠蔽工作の様子を、特にその初期段階の展開に焦点を当てて検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
植民地独立期のイギリス帝国による文書隠蔽工作は、世界の現代史の理解を大きく歪めるものであった可能性がある。つまりこの文書隠蔽工作で何が起きたのかを解明することは、それ自体として学術的な意義があると言えるが、さらに事例を超えた社会的な意義を考えることも出来る。今日、多くの国家や民族は、自分たちの過去についての記憶を共有してアイデンティティの一部としている。その一方で、同じ集団が、自分たちにとって都合の悪い歴史からは目をそらしながら何とか社会としてのまとまりを保っているという場合もある。集合的記憶の裏にある意図的で集合的な忘却、言わば集合的忘却に、本研究は光を照らし得るのだ。

研究成果の概要（英文）：The twentieth century was a period of imperial decline and national liberation, during which the Japanese and European empires retreated from around the world as dozens of their former colonies gained independence. Amid the decolonization processes, the aforementioned imperial powers are believed to have concealed many of the records of their unsavory past. While it is difficult to acquire a clear picture of how these acts of obfuscation took place, new information about the history of the British Empire is beginning to emerge. Drawing on newly-discovered sources, this research project examines how, throughout its colonies, the British Empire concealed and destroyed sensitive documents in the mid to late twentieth century, with a particular emphasis on the early stages of this process.

研究分野：イギリス帝国史、中東現代史

キーワード：集合的記憶　忘却　文書管理　植民地独立　脱植民地化

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

第二次世界大戦後、ヨーロッパや日本の諸帝国は、世界各地から撤退した。この時に、各帝国にとって都合の悪い過去の記録が何らかの形で処分されただろうということは想像にかたくないが、その多くは謎に包まれている。当時最大勢力の一つであったイギリス帝国も何かしら文書の隠蔽を行なっただろうと考えられるが、やはりその詳細はほとんど知られていない。

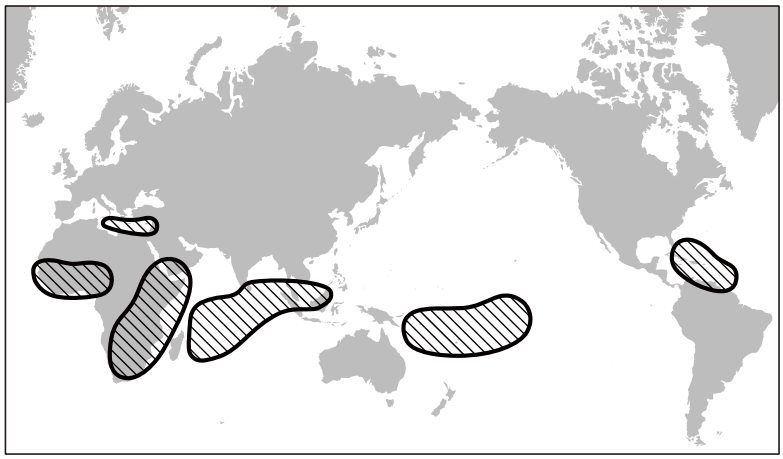
こうした中、イギリス帝国が隠蔽したはずの植民地文書が、実はロンドン郊外に保管されていたことを近年イギリス政府は認めた。この新出史料の存在が明らかになると、多くの研究者やジャーナリストは、これを政治スキャンダルとして批判した。一般の秘密文書の場合、イギリス政府はその存在については一旦認めた上で、その内容を非公開にする手続きを取る。しかし今回の場合、イギリス政府はその存在まで隠していた。これは国民に対する裏切りだ、というのである。こうした視点からは、どちらかと言えば現代の政治問題としてこの話題が取り上げられる傾向にある。しかし、ここで忘れてならないのは、今から半世紀ほど前、植民地独立という混乱の最中、必死で文書隠蔽工作が行われたということである。一体誰が、何を忘れなければならなかったのか？歴史をどのように記憶し、正当化しようとしたのか？こうした問題、当時の歴史認識に光を当てるためには、文書隠蔽工作自体がどのように展開したのかを解明する必要があると研究代表者は考えた。

２．研究の目的

研究代表者の長期目標は、近年発見された新出史料を読み解くことによって、イギリス帝国が第二次世界大戦後に世界各地で行なった文書隠蔽工作の全容を明らかにすることである。この長期目標に向けた重要なステップとして、本研究計画では、特に文書隠蔽工作の初期段階の展開を明らかにすることを研究目的に設定した。文書隠蔽工作は 1940 年代にはじまって 20 世紀後半まで続くが、その基本的な流れが確立したのは 1940 年代後半から 1950 年代前半ではないかと推定される。本研究計画ではこの初期段階の重要性に着目し、いつ、どこで、どのような経緯を経て文書隠蔽工作が政策として確立したのかを検討することにした。

３．研究の方法

本研究は 4 年間の個人研究であり、具体的な調査方法としては二つの柱を設定した。すなわち作業の一つ目の柱は、イギリスで近年発見された新出史料を検討することである。これは、イギリス帝国が世界の約 37 の植民地（地図網掛け）で隠蔽



し、秘密裡にイギリスに移送した約 2 万ファイルの植民地文書である。その経緯から「移送文書群」とも呼ばれる。本研究では、かつて隠蔽されたはずの移送文書群を読み解くことによって、逆にこの文書群が移送される経緯となった政策、すなわちイギリスによる大規模な文書隠蔽工作を解明することを目指した。無論、移送文書群全体を網羅的に検討することは現実的でない。そこで本研究計画では、特に文書隠蔽工作の初期展開の様子についての情報を含むのではないかと思われるファイルを重点的に検討した。

作業のもう一つの柱は、移送文書群から読み取った内容を、イギリス帝国にかかわる他の史料と照合することである。ここで特に焦点を当てたのは、（秘密裡に移送された移送文書群とは異なり）正規の手続きを経て移管された植民地文書などイギリスで収集可能な史料であり、またそれに加えていくつかの重要な植民地に残された史料である。こうした史料と比較検討することによって、移送文書群の内容と特性についての理解を深め、立体的な検討を行うことを試みた。

４．研究成果

こうした検討の結果、当初研究目的として設定した問題については一定の区切りをつけるが出来た。すなわち、イギリス帝国の文書隠蔽工作の初期段階において重要な舞台となったのは 1940 年代後半のスリランカ（セイロン）であり、独立に向けて法的な手続きを整理する中で、後々世界各地に拡大することになる文書隠蔽工作につながる政策が議論されたというのが現段階での結論である。他にもインドやパレスチナで同様の動きがあったことを示唆する史料もあり、本研究計画ではこうした周辺状況についても可能な限り調査を進めたが、詳細を十分に伝える史料を発見することは出来なかった。これまで検討することが出来た史料から推定する限り、やはりスリランカが初期段階においては最も重要な舞台だったと推定される。

また、本研究計画を進めていく中で、いくつか副次的なテーマについても進展があった。一つ目は、イギリス帝国が、どこで、何を、隠蔽したのかということである。この研究を開始した当初に立てた想定では、イギリス帝国は都合の悪い出来事が起きた地域でより大規模な隠蔽を行い、また隠蔽した資料は当然都合の悪い情報を含んだものだったのだろうと考えていた。しかし実際に調査を進めると、必ずしもそのように単純なものではないことが分かってきた。移送文書群の分量と内容には、地域ごとに大きな幅があるのだ。しかも、その濃淡は各植民地の独立の様子、例えばイギリスがどの程度撤退に苦戦したかという植民地独立のあり方などから簡単に説明されるようなものではない。この点から特に興味深い対照をなす植民地がいくつかあるので、こうした植民地についてもこれから比較しながら検討を進めることで、植民地独立期のイギリス帝国全体の性質について理解を深めることが出来るのではないかと考えている。

さらに、本研究の過程で出版した学術論文に対して、学界を超えて一般読者からも反響があった。しかもこうした反応は世界各地からあり、イギリスによる文書隠蔽工作に対する関心が世界的に強いことが確認出来た。これは当初の想定を超える嬉しい誤算である。こうした各地の市民らとより直接的に対話をする方法を検討することも重要になってくるだろう。

以上の通り、本研究課題では当初設定した研究目的が概ね達成されただけでなく、当初の想定を超えていくつか副次的な収穫をあげることもできた。こうした研究成果を踏まえて、今後は研究代表者が掲げている長期目標に向けてさらに研究を発展させたい。すなわち、本研究計画で得られた内容を発展させ、イギリス帝国による文書隠蔽工作の全容の解明に向け

てさらに研究を進めたいと考えている。また、将来的にはこうした成果を一冊の本にまとめて出版して学術的に発信するとともに、様々な手段を通じて研究成果を広く世の中に還元したい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 佐藤尚平	４．巻 985
２．論文標題 破棄された文書に光を当てる ： イギリス帝国による植民地文書の隠蔽	５．発行年 2019年
３．雑誌名 歴史学研究	６．最初と最後の頁 11-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Sato Shohei	４．巻 45
２．論文標題 ‘Operation Legacy’: Britain’s Destruction and Concealment of Colonial Records Worldwide	５．発行年 2017年
３．雑誌名 The Journal of Imperial and Commonwealth History	６．最初と最後の頁 697～719
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/03086534.2017.1294256	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 Shohei Sato
２．発表標題 Towards a global comparison of selective amnesia: Britain’s colonial cover-up across Asia
３．学会等名 The 11th International Conference of Asia Scholars (ICAS 11)（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 Chen Jian, Martin Klimke, Masha Kirasirova, Mary Nolan, Marilyn Young, Joanna Waley-Cohen (eds)	４．発行年 2018年
２．出版社 Routledge	５．総ページ数 616 (469-479)
３．書名 Routledge Handbook of the Global Sixties	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関